

## 『現代カタストロフ論』金子勝 児玉龍彦

岩波新書／2022年12月／946円（税込）

現代という、「出口の見えない時代」をとらえる示唆に富んだ本だ。おそらく、何度も読みかえすことになると思う。著者の二人は、経済も生命科学も「50年周期で大転換を起こしてきた」と主張する。そして現代もその時期であり、カタストロフとは破滅ではなく、次の安定を生み出すものだとする。それが「ましなもの」になるには何が大切な、にもふれている。

## 『日本史を疑え』本郷和人

文春新書／2022年5月／924円（税込）

筆者は、この本で定説や「常識」を次々とまな板にのせて小気味よく疑問をぶつけ、自分なりの考えを展開している。それが「当時のリアルに迫る」一番の方法で、実はそれが「日本史を学ぶ」ということなのだ、と納得できる。いくつか例を。

律令とは「絵にかいた餅」だった。鎌倉時代後期の天皇は名君ぞろい。北条時宗は英雄ではない。江戸幕府が減んだほんとうの理由は？など、など。

## 『韓国併合』森万佑子

中公新書／2022年8月／946円（税込）

韓国併合の授業は日本史でも世界史でも日本を主語にして語ることが多いだろう。本書は韓国併合に至る過程を、大韓帝国の成立と滅亡という視点で論じており、高宗の意志や意図を汲み取ろうとしているところに特徴がある。高宗を、父の大院君・外戚閔氏・清朝・ロシア・日本に従い続ける他律的な王ではなく、君主として主体的に選択する姿が描かれる。また終章で、日韓議定書以降の条約の有効・無効に関する現在の論争が本書のまとめのように置かれ、手短かに紹介しているのもありがたい。

## 『食べる経済学』下川哲

大和書房／2021年12月／1,870円（税込）

食べることを教材化すれば生徒の関心を引き出すことができるはずだが意外と難しい。本書は、どのような食料消費が社会にとって最も望ましいかという問いを立て、食を事例に経済学の基礎を知ることができ、途上国で肥満が増えていることなど、食に関する意外な事実をいくつも紹介してくれている。

## 『いつもの言葉を哲学する』古田徹也

朝日新書／2021年12月／935円（税込）

「非常に面白く、また、ひどく恐ろしい」言葉を「生ける文化遺産」としてとても大切にしたい鋭の哲学者による一冊。難解な言葉を対象とするのではなく、日常生活の中にある極々ありふれた言葉が考察の対象とされている。題名にある「哲学」とは（一方的な非難や攻撃ではなく、対象を吟味してその問題や可能性を明確にする）「批判」の営みのことという。「私たちの生活は言葉とともにあり、そのつどの表現と対話の場としてある」のであるから、言葉を大切に自分の発する言葉に責任を持ち、自他（の言葉や存在そのもの）を互いに尊重し合うことの重要性に改めて気付かされる。

## 『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』広田照幸

ちくまプリマー新書／2022年5月／946円（税込）

生徒や学生・教員・保護者や地域社会の住民など、どのような立場から学校に関わり捉えるかによってその景色も評価も異なるが、教育の大切さは揺るぎないことが再確認される長編のエッセイ。

## 『ウクライナ危機から考える「戦争」と「教育」』

日本教育学会 国際交流委員会編

教育開発研究所／2022年10月5日／1,980円（税込）

2023年2月でロシアによるウクライナ侵攻は1年が経過する。日々社会科の授業でESDなどの実践を取り入れて世界平和について考え、少しでも貢献しようという意気込みの中で授業をおこないつつも、現実の世界では毎日現地から生々しい映像と死者の報告を絶え間なく私たちは受けとる。果たして学校教育の中で、今まさに起こっている危機にどのような貢献ができるのか、無力感を感じる中で本書を知った。多様な価値観を共有できる場（コモンズ）としての学校、そしてその多様な価値観を何の心配もなく表出でき、対話し、思考していける授業を実践していくことが、地道ながらも授業者にできる平和への貢献ではないだろうか。本書を読んで、そのことを強く感じるとともに、教育は決して無力なのではなく、教育でしかできない貢献をこれからも探究し、世界の出来事はすべて自分ごととしてとらえられるような思考を育てていきたいと強く思わせてくれた。